



**Data**

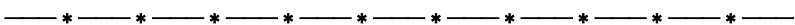
監督: ロブ・ライナー  
 脚本: ジョーイ・ハートストーン  
 出演: ウディ・ハレルソン/マイケル・スターール=デヴィッド/リチャード・ジェンキンス/ビル・プルマン/ジェフリー・ドノヴァン/キム・アレン/ジェニファー・ジェイソン・リー/0・トーマス・ハウエル/ダグ・マッケオン/マイケル・モーズリー/オリヴァー・エドウィン

## 👁️👁️ みどころ

JFK(ジョン・F・ケネディ)なら知ってるが、LBJって一体ダレ?それはリンドン・B・ジョンソンのことだ。

米政界に彗星の如く登場したエリートでハンサムな JFK は、大統領選挙に臨んでなぜ南部出身の成り上がり議員 LBJ を副大統領候補に指名したの?そんな疑問もあるが、1963年11月22日にダラスで起きた JFK の暗殺によって、米国民はもちろん LBJ の運命も大きく変わることに・・・。

“ケネディ映画”は多いが、“ジョンソン映画”は本作がはじめて。本作ラストに見るジョンソン演説を、“ケネディ演説”、“チャーチル演説”、“チャップリン演説”等と対比して勉強すると共に、公民権運動、ベトナム戦争が焦点だった1960年代のアメリカを、当時の日本と対比しながらしっかり振り返りたい。



## ■□■LBJって誰? JFKなら知ってるが・・・■□■

本作の原題は『LBJ』だが、それって一体ナニ?それが人名を表すものだとわかってても、JFK (ジョン・F・ケネディ) なら知ってるが、LBJって一体ダレ?それは、リンドン・B・ジョンソン (ウディ・ハレルソン) のこと。つまり、1960年11月の大統領選挙で、共和党のニクソン候補を破って第35 大統領に就任した民主党のジョン・F・ケネディ大統領 (ジェフリー・ドノヴァン) のパートナーたる副大統領のことだ。しかし、彼は当時人気抜群だった若きケネディの影に隠れた地味な存在だったから、マスコミも国民も全然 LBJ には関心を向けていなかった。

JFK が大統領選挙に臨むに際して、弟のロバート・F・ケネディ（マイケル・スタール＝デヴィッド）らの反対を押し切って、LBJ を副大統領候補に選んだのは、北東部出身のエリート議員の JFK にとって、南部の成り上がり議員ながら、民主党の“院内総務”として、交渉能力（だけは？）抜群の能力を誇っていた LBJ を味方に引き入れた方が得策だという戦略的判断のため。したがって、JFK と LBJ の 2 人がそろって大統領、副大統領に選出されると、兄から司法長官に任命されたロバート・F・ケネディは LBJ とことごとく対立し、その発言力を封じようとしたから、はやりにくいことこの上なし。そんな中、LBJ は如何なる役割を？

## ■ケネディ映画は名作がどっさり！ジョンソン映画は？■

1949年生まれの私は1961年4月に愛光中学に入ったが、そこで愛光学園の創設者であり、“愛と光の使徒”たらんことを熱く訴えていた田中校長から、ケネディ大統領のすばらしさと彼が高く掲げるすばらしい理想について何度も聞かされたことをよく覚えている。そのため、当時の私にとって、ケネディ大統領は理想の人物の1人だったが、1967年4月に大阪大学に入り、学生運動にのめり込む中で「ケネディとアメリカ帝国主義」という文献を勉強すると、ケネディは理想主義者ではなく、ベトナムへの帝国主義的侵略を進める“悪玉”だと教えられてビックリ。その“落差”に戸惑ったものだ。

それはともかく、ケネディ大統領が今日ま長くで人々の記憶に残り、かつ何度も映画化されているのは、任期3年目の1963年11月にテキサス州ダラスで暗殺され、悲劇の死を遂げてしまったため。ケネディ大統領を撃った男としてオズワルドがすぐに逮捕されたが、驚くべきことに、このオズワルドも公衆の面前で射殺されて死亡。ケネディ大統領暗殺の犯人は、死後55年を経た今でもわからないままだ。ケネディ暗殺事件を巡ってはたくさんの映画がつくられているが、その代表作はオリバー・ストーン監督の『JFK』（91年）。ケビン・コスナーが地方検事役を演じた同作では、CIA やマフィアさらに一部の大物政治家がケネディ暗殺の犯人もしくは黒幕だ、というものすごい設定にされているので、こりゃ必見！その他も、『パークラント』（14年）（『シネマ33』未掲載）等があるし、ジャクリーンを主人公にした映画では『ジャッキー／ファーストレディ 最後の使命』（16年）（『シネマ40』未掲載）等もある。他方、1962年のキューバ危機を巡ってケネディは、“東西冷戦時代”のソ連のリーダーだったフルシチョフと、あわや核戦争一歩手前の神経戦を演じたが、それをスリリングに描いた名作が『13デイズ』（00年）（『シネマ1』63頁）だった。

このように、ケネディを描いた映画はたくさんあるが、そこにジョンソン副大統領が登場することはまずない。それなのに、なぜ今ジョンソン副大統領を主役に据えた『LBJ』と題された本作が登場したの？それは、ハリウwoodsの優秀脚本を選ぶ「ザ・ブラックリスト」のトップ10に選出されたジョーイ・ハートストーンが書いた脚本に、ロブ・ライナ

一監督が出会いホレてしまったためらしい。しかして、本作が描く LBJ の実像とは？

## ■□■権力の承継あれこれ。LBJは98分で！■□■

シーザーの暗殺に伴う権力闘争。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と続いた異例の権力闘争。洋の東西、時代の新旧を問わず、権力闘争とそれに伴う権力の承継あれこれの物語は面白い。秦の始皇帝や「三国志」で有名な、蜀の国を作った劉備玄德は、初代があまりに偉大すぎたためか、2代目で国が減ってしまったが、徳川幕府は約250年間、15代も続いた。

人の突然の死亡による権力闘争と権力の承継は、日本では2000年4月に小渕恵三首相が脳梗塞で死亡した時の例がある。そこでは、森喜朗、青木幹雄、村上正邦、野中広務、亀井静香の5人の有力政治家が密室で談合した疑惑が国民から批判され、密室から生まれた森喜朗内閣は短命に終わった。それはともかく、1963年11月22日のJFKの暗殺による死亡に米国民は悲嘆にくれたが、そうとばかり言てられないのがLBJ。つまり、憲法の規定によって、副大統領たるLBJはケネディの後を継いで早急に第36代大統領に就任しなければならないのだが、そのためには、まず自分の命を守ることが大切。そう考えると彼は一体どこに逃げればいいのか？そして、大統領就任のためには何をすればいいのか？また、憲法上の手続きはまだしも、米国民は人気絶大のJFKの後、地味で不人気のLBJへの権力の承継を認めてくれるのか？

今年のセ・リーグで最下位に終わった阪神タイガースは、辞任（事実上の解任のうわさもチラホラ？）を決めた金本知憲監督の後を継いで、2軍監督だった矢野燿大が次期監督に就任することを承諾したが、その権力承継には数日間を要した。しかし、JFKからLBJへの権力承継はわずか98分というからすごい。東西冷戦がおお続き、ベトナム戦争と公民権運動が激化している今、“権力の空白”を生むことを絶対に避けなければならないのは当然だが、わずか98分での権力承継は立派としかいいようがない。しかし、その後の展開は？

## ■□■この変身をどう評価？私は大賛成だが・・・■□■

“君子は豹変す”ということわざがある。しかし、政治家は自分の政策に信念を持って取り組むべきだから、その大切な政策で豹変するのは如何なもの？そう考えるのが普通だから、1994年6月30日に日本社会党の村山富市氏を首班とした、自社さ連立政権の誕生にはビックリ！しかも、それまで「自衛隊は憲法違反」と主張していた社会党が、政権の座につくや否や、「自衛隊は合憲」としたから、その豹変ぶりには更にビックリだった。本作中盤以降は、LBJがそんな風に“君子は豹変す”を地でいくので、それに注目！

JFK 政権が最重要法案と提示したのが“公民権法案”。JFK が暗殺された1963年11月の半年前たる4～5月にはアラバマ州バーミングハムで人種差別反対デモが起こり、

各地で人種暴動が拡大していたし、8月には、人種差別反対ワシントン大行進に20万人が参加し、有名なキング牧師の「私には夢がある」演説をしていた。そんな、進歩的な公民権法案に共和党はもちろん反対していたし、民主党内でも、公民権法を巡って長年の良き相談相手であり師弟の関係にあった南部の指導者、リチャード・ラッセル上院議員（リチャード・ジェンキンス）や、同じテキサス州出身でジョンソンを支持していたラルフ・ヤーボロー上院議員（ビル・ブルマン）はこれに反対していた。したがって、この2人にしてみれば、それまで公民権法案に反対していたLBJが副大統領として政権内に入れば、JFKが提言する公民権法案に少しでも修正を加えてくれるはず。そう期待したのは当然だが、大統領就任演説でLBJはケネディ路線を引き継ぐと宣言した上、公民権法案については妥協なく成立させると公言したから、アレレ……。本作前半は、民主党保守派として進歩派のJFKと対決していたLBJが、本作後半ではJFKの路線を完璧に引き継ぎ、民主党保守派のラッセルやヤーボローと対決していく姿を描くのでそれに注目！

ちなみに、10月17日朝刊各紙は、鳩山由紀夫内閣で行政刷新担当大臣、菅直人内閣で官房長官を務めた旧社会党の仙谷由人氏の死亡を報じた。東大生だった彼は、60年安保闘争の際、全学連の闘士として活躍し、社会党の代議士になった後も理論派兼武闘派として鳴らしたが、柔軟な考え方を持っていた彼は、自党内の有力議員とも親交を深かめてきた。そんな仙谷氏のような有能な政治家がいたからこそ、村山首相も鳩山首相も総理大臣の任務をそれなりに遂行できたわけだ。もし、この仙谷氏がLBJのようにトップの座に上り詰めていたら、社会党の政策はどうなっていたのだろうか。公民権法案を巡るLBJの変身ぶりを考えるについては、そんなことを考えてみるのも一興だ。

## ■□■この演説は何点？ v s JFK 演説・チャーチル演説■□■

2018年3月には『ウィストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』（17年）（『シネマ41』26頁）が、続いて同年8月には『チャーチルノルマンディーの決断』（17年）（『シネマ42』115頁）が公開された。前者は1940年5月の“ダンケルクの戦い”をテーマとし、後者はタイトル通り1944年“ノルマンディーの戦い”をテーマとする映画だった。同じ年に2作も“チャーチル映画”が公開されるのは異例だが、両者ともそのクライマックスはチャーチルの名演説。前者は議会で行ったもので、後者はラジオの前で行ったものだ。歴史に残る政治家の名演説はたくさんあるが、映画史上に残る名演説は何とんでも、チャールズ・チャップリンが監督・主演した『チャップリンの独裁者』（60年）のラストにおける6分間にわたる名演説だ。“ネバーサレンダー”を繰り返した『ウィストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』にみるチャーチルの名演説は、英国民はナチスドイツに決して屈しないことを宣言し、英国民に対して共に苦難を分かち合おうと呼びかけるものだったが、もしあの戦争でイギリスが負けていれば……。それに対して、『チャップリンの独裁者』の中でチャップリンがヒトラーに化けて行った演説は

人類愛を訴えたもので、実に感動的なものだった。

他方、1961年1月にJFKが行った大統領就任演説は、米国民に夢と希望を与え、バラ色の将来を見せるものではなかった。あらためてそれを確認するため、以下その部分を引用すれば、次のとおりだ。

『だから国民諸君よ。国家が諸君のために何ができるかを問わないで欲しい——諸君が国家のために何ができるのかを問うて欲しい。

世界の市民諸君よ。米国が諸君のために何ができるかを問うのではなく、我々が人類の自由のために共に何ができるのかを問うて欲しい。

最後に、米国民も世界市民も、ここにいる我々が諸君に求めるのと同じ高い水準の強さと犠牲を、我々に求めて欲しい。我々にとっての唯一確かな報酬とは良心の喜びであり、我々の行いに最後の審判を下すのは歴史である。主の恵みと主の助けを求めつつ、しかも神の御業をこの地上で為すのはまさに我々なのだと肝に銘じて、我々の愛する地を導くために前進しようではないか。』

しかして、このJFK演説の草稿を書いたのは、セオドア・ソレンセン（ブレント・ベイリー）。本作には、いつも兄の側に寄り添っている弟のロバート・F・ケネディと共に、JFK政権の中核として活躍する彼の姿が登場するのでそれにも注目！しかし、トップが変われば、必然的にその側近も交代するもの。それが世の常だが、LBJは大統領に就任するについて、JFKの側近たちの残留を希望し、ソレンセンに就任演説の草稿作成を依頼していた。迫り来る議会での演説まで残された日時は僅か。LBJはJFKの路線を引き継ぐと言っているが、それほどこまで本音なの？すると、演説草稿に書いてもいい限度はどこまでなの？そんな悩みの中でぎりぎりまでかかってソレンセンが草稿を書いたLBJの大統領就任演説の出来ばえは？

議会では、公民権法案推進と語ればたちまち野次を飛ばそうとする共和党の議員たちが勢ぞろいしていた。民主党内でも、南部出身のラルフ・ヤーボローやリチャード・ラッセル等の保守派議員は彼らと同じだ。さらに、前部の席ではLBJが本当に兄の路線を引き継ぐのか否かに懐疑的なロバート・F・ケネディが、LBJの演説を一言も聞き漏らすまいと聞き耳を立てていた。さあ、そんな極度の緊張状態下でのLBJの就任演説の出来は？もちろん、私はこれをはじめ聞いていたが、さてあなたの採点は何点・・・？

## ■ケネディの意志を継いだ男=LBJの評価は？■

1963年11月にLBJが第36代大統領に就任したのは、いわば、“棚からボタ餅”方式によるものだが、翌1964年11月の大統領選挙でLBJは61.1%の投票を得て、共和党のバリー・ゴールドウォーター候補に地滑り的勝利を収めたから立派なものだ。しかし、残念ながら1964年4月から67年3月まで高校生だった私は、その期間中にLBJが行った①貧困との戦い、②偉大な社会（健康医療保険、貧困対策、環境規制、公共交通

整備、公教育改革、犯罪対策)、③公民権法の制定等の“実績”を全く知らない。逆に、1967年4月に大阪大学に入学した後は、激化するベトナム戦争への反対運動が日本でも盛り上がっていく中、私自身が学生運動の中で“反ジョンソン”の立場を明確にしていくことになった。

ちなみに、10月13日付日経新聞夕刊は、千葉市美術館が「1968年 激動の時代の芸術」展を開催していることを紹介した。その記事の中では批評家の四方田犬彦氏が今年出版した全3巻の編著書「1968」(筑摩選書)が紹介されている。その内容は、時代の空気をきめ細かく描いたもので、演劇、音楽、映画、ファッション、文学、漫画と素材は幅広く、おびただしい事件や文化的実験が絶え間なく頻発していたのが1968年だったと説いているようだ。また、同記事では大衆文化評論の中川右介氏の「1968年」(朝日新書)や社会学者の小杉亮子氏の「東大紛争の語り」(新曜社)も紹介されている。

しかして、同記事の結びは「今年は50年の節目。社会運動や文化活動の主役だった団塊世代も70歳代に入った。自由自在な異議申し立てが街にあふれていた1968年への関心は高まりそうだ。」とされているが、まさにそのとおり。このように、日本では激動した1968年だが、アメリカでは?LBJ 関連でいうと、アメリカでは①1968年3月に北ベトナム空爆の停止を発表、LBJ が次期大統領選への不出馬を表明、②4月にマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師暗殺、③6月にロバート・F・ケネディ前司法長官暗殺、そして、④1968年11月共和党のリチャード・ニクソンが民主党のH.ハンフリーを抑えて第37大統領に就任した。

それから50年。2019年1月には70歳になる私も、あの“1968年”を回想し、かつ反省しつつ、新たな目標を見つけ出したい。

2018 (平成30) 年10月22日記